

日本

ハンザキ研究所ニュース 2011(7) : 通巻 No. 67



発行2011年7月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

姫路市立水族館の再開

平成20年11月に休館となっていた姫路市立水族館が再開された。2年半もの長期間の休みは大規模な補修が必要になったからだ。開館は1966年であり45年の時間が過ぎている。本館部分はその数年前にオープンした屋上の市民プールを支える構造物として建設されているので半世紀に及ぶ時間の経過で老朽化がひどかったのだ。私の現役時代である1996~1998年にも7億円をかけた改修工事が行われているが、今回は10億円ほどの経費で、完全なバリアフリー化と旧モノレール駅舎を新館として整備したことが話題となっている。モノレールは時代の先端を行く発想であったが、少々早すぎたのか8年間の営業で廃止となった。車庫に入られていたモノレール車両も公開されており、その45年前の映像が動画でも映し出されていて、当時を知る一人として懐かしく思った。



オオサンショウウオのレプリカに触れることができる

新館は、ハンザキ研から前日に里帰りしたばかりの2匹のハンザキを始めとした淡水系の生き物の展示場となっていた。手にすることのできる展示の工夫が多数なされていたが、やはり本館の水槽に比べて新鮮な感じが出ていて良かった。本館は耐震構造として半数ほどの水槽が姿を消しており、楽屋裏は廃墟のようで無残な状況であった。

バリアフリーとなったので、車椅子やバギーなどで自由に見学することができるようになっていた。立体駐車場からエレベーターやスロープなどで結ばれていて、招待された車椅子の皆さんが楽しそうに見学していた。東京や鹿児島、宮島などからも旧知の水族館人がセレモニーに参集していて久しぶりのことであった。7月2日から営業開始である。



写真1 空中楼閣のような水族館へのアプローチ



写真2 ハンザキの鯉のぼり?



写真3 マイクロチップ挿入実習中の朝来市教委職員



写真4 ハンザキ保護センターの脱走防止工事



写真5 カモガワハンザキが吐き出したイシガメ



写真6 大きな葉で緑陰を作るキリの木

カモガワ・ハンザキの本格的な調査開始

京都の賀茂川で変なハンザキがいるという噂が流れてから久しい。今年度から文化庁の補助を受けて京都市教育委員会が実態調査を開始することになった。5月に開催された委員会では、DNA鑑定の結果が出たらハイブリッドは即“殺”処分するべきだと言う意見や、できれば殺すことなく囲い込む、収容できなければ有効利用をとといった意見が出た。取りあえずは現状がどんな具合なのか調べなくてはならない。今年度はハンザキ研に収容することになり、脱走防止の本格的な工事が行われた(写真4)。今までは、私の素人工事でのいできたが多数の個体が運ばれてくることになれば万全を期することにならなければならない。

第一陣として18日の未明に19個体搬入されてきた。5人の調査員が3時間ほどで捕獲した数だと言う。今後の調査でどの位の個体が運び込まれてくるのか分からないが、とにかく収容できる範囲は受け入れることとしている。現在は児童用の25mプールを改造した10区画の内の1区画に109個体を収容している。込み合っているのは当然だが、全長が60cmから130cmという差は大変な大きさの差であり、小型個体は丸呑みにされる可能性がある。これを大きさ別に分けて収容する必要があるのでこの作業も早くしなければならない。10区画であるから単純に計算しても1,000個体の収容が可能にはなるが、その数にまで至るのであるだろうか？

.....

アコ・バスの運転手さんのこと

“アコ・バス”は朝来市内を走るデマンド・バスの愛称である。過疎地における高齢者の買い物や通院の足を提供する朝来市のサービス事業である。当・黒川地区は火・金の午前午後各一便走ってくれるが、前日の17時までには予約しなくてはならない。時々電話を忘れてしまうことがあるが、9人乗りのマイクロバスで予約が無ければ運休になる。予約人数オーバーになると中型のバスが来るが、支流の狭い道に入れにくいことがあったりする。ある時、停留所で待っている私の前にタクシーが止まって乗ってくださいと言う。どこから乗っても500円のバス、タクシーでは6000円は掛かる。不審な顔の私に向かって運転手さんは、今日は支流からの予約があって私一人がはみ出ることになってのお迎えであった。

乗客は常連の方が多く、すっかり顔なじみになった。週一くらいの割合で街への食料調達に便利に使わせていただいている。ハンザキ研の前には停留所は無いが、顔なじみの運転手さんは黙っていても前で止めてくれる。ハンザキ研に来る客も同様で、街からやって来た皆さんは感激している。この運転手さんの五感はすごいのだ。乗車した途端、「カメムシの臭いがします」と言われて、作業中に踏み潰したことを思い出した。また「夕べは精を付けましたね」と餃子を食べたことを当てられたことがあった。交通標識の裏側に生みつけたモリアオガエルの卵塊、山の稜線のタカの巣などを教えていただいている。運転しながらの観察である。鋭い眼力でありその五感には感心するばかりだ。

文化財に対する取り組み

ハンザキは文化財であると言うと変な顔をされることがある。神社仏閣書画骨董の類が文化財と考えられているからだろう。しかし、文化財保護法の中には史跡名勝天然記念物の項目があって、ハンザキはその中でも特別天然記念物に指定されているのだ。天然記念物といわれるものには国指定以外にも都道府県指定から市町村指定までであるが、“特別・・・”と名が付くのは国の指定だけである。だから“国の特別天然記念物”という表現は二重になるのだが、強調するべく“国の・・・”とつけることが多いようだ。

それだけ重要視されているのに、現実の対応は充分とはいえない状況にある。それは、ハンザキが発見されても、どのような処置をしたらいいのかが自治体の文化財担当に周知されていないからだ。文化財担当は教育委員会に属している場合が多いが、担当職員が特に市町村では専門家であることは少なく、ある日突然に人事異動の結果その日から担当になるのであるから無理が出てくるのだ。それでも担当職員は頑張っていて、特に兵庫県では豊岡市・養父市・宍粟市・朝来市ではマイクロチップや読み取り機などをそろえてハンザキ情報に対処することができるようになってきている。

鳥取県では“鳥取県文化財保護事務必携”という冊子を1995年に作った。これがあれば担当したばかりでも対処できるもので、各自治体も見習うべきことだろう。また、三重県では河川工事に際する対応を文書化してハンザキの保護に努めている。このように各地での嬉しい動きがあって、何とかハンザキの未来に希望が持てるような気がしているが実際には多くの自治体ではまだまだの状況にあるようだ。

マイクロチップはガラスのカプセルに入れられたバーコードを動物の体内に挿入しておき永久的な個体識別用の標識となる。ハンザキの場合には左肩に打ち込むことにしているので、大きな体全体を探す必要は無い。直径2^{ミリ}長さ11^{ミリ}だが、これを入れる針は太くて少々痛々しいが、うまく刺せると出血も無くハンザキもビクともしないが、なかなか出血がとまらないこともある。こんなことは実際にやってみないと分からないことであり、実習する機会があれば経験しておくのと割りに簡単なことでもある。

マイクロチップの欠点は国産ではないことで、1本千円と高価なこと、読み取り機に防水性があるのはアビット社の物だが日本では圧倒的にトローバン社の物が流通しているようだ。元々、犬猫などの登録用に開発された物で、それが動物園や水族館における血統登録に利用されるようになったり、実験動物の系統管理に使われたりしてきた。長生きする動物の個体を確実に識別して長期間追跡調査をすることができるようになったが、ハンザキもこれからの長い追跡で寿命が解明されることだろう。私が生野町の市川で登録した1500匹ほどのハンザキの内、850匹にチップを入れることができた。これを追跡するにはまだまだ多くの時間が必要だ。現在の所34年間の追跡が最長である。後17年間この個体を追うことができればシーボルトがオランダに持ち帰った個体の飼育記録51年に追いつくことができる。自然の川での記録となれば現在でも最長記録ではないかと思うのだが・・・

節電のための緑化が流行っている？

今年は窓や壁をゴーヤの簾で日よけすることが流行っているそうである。節電のためだが見た目にも涼しいし栄養の有る実も付けてくれる植物だ。子供の頃は朝顔や糸瓜、瓢箪そして大きな美しい花を咲かせる夕顔などが主役だった。しかし、ハンザキ研における緑化の最たる物はキリの木である。キリの枝は1年で3～4回は伸びる。凄く成長の早い木である。宿舎の南側に縁側を突き抜けてキリの木を伸ばしている。最初は窓からの夏の日差しに閉口してビーチパラソルで日陰を作っていた。縁側の下に切り払われたキリの株から新芽が吹いているのを見つけたので、縁板を2～3枚外して伸ばすことにして4年が過ぎた。今年は屋根の上まで緑陰を作る位の高さまで成長している。南側の窓からは陽は入らなくなった。快適な夏である。アオジソは日陰で柔らかな大きな葉を広げているが、サンショウは少々モヤシ気味になってしまった。おまけに大きなキリの葉がバサバサ落ちてきてサンショウの棘にかかってさらに光を遮ってしまう。キリの花の薄紫色は素敵だ。秋口に蕾の基ができていて、春になると開く。冬はすっかり葉が落ちて暖かい陽の光が部屋に入り込んでくる。全く一石三鳥をいく植物である。前の区長だった竹村勲さんがクリとキリで彫ったハンザキを下さったが、軽いキリの木なのに彫ろうとすると硬くて難儀なのだそうだ。ハンザキ研のキリの木も難儀が迫ってきた。左右には縁側の板を外せばいいのだが、はんざきブロックに幹が食い込んできたのだ。ブロックは簡単には動かない・・・

(写真6)

.....

ハンザキのぼり

数年来の思いがかなってハンザキの“コイ？のぼり”ができた。さっそく竿に付けて掲げる。風に乗って泳ぎだしたハンザキは手足の部分がはためいていかにも水の中を泳いでいる感じが出ていて可愛い。しかし、実は両側共に背中からの姿なのである。風任せのことなので、下から見て背中の方がハンザキらしく見えるのでそのようなデザインにしてもらった。最近“コイ”に代えてイルカやカツオなどのノボリが流行っているようだ。本物の“コイのぼり”はバランスよく泳ぐように設計されているのだそうである。手近にあった竹ざおは短いので、校庭の校旗掲揚の竿？（ポール、日本語では棒？何て言ったらいいのでしょうか？）に付けてみたが、高いので2回のノボリでは少々小さくて迫力が無い。

しかし、両方を見ていると風の向きが全く異なることが分かった。低い場所にあるのは谷風ではためき、高い場所のノボリは山風に乗るようだ。そういえば、台風6号の風もほとんど感ずることは無かった。頭上の高圧線はヒューヒューと鳴っていたが、谷底のハンザキ研では山に遮られて無風の状況だった。この“ハンザキのぼり”は、これからのイベントのたびにあちこちに出張することになる。皆さんも見かけた時には空を仰ぎ見てください。アコ・バスの運転手さんからは、目ざとく早速「アンコウ・ノボリ」が上がりますねと、乗車すると同時に話しかけられた。(写真2)

吐き出されたイシガメ

2日に8個体のカモガワ・ハンザキが運びこまれた。NHKの交雑種に関する取材があり、リポーターの熊田曜子さんとプールに放すところが撮影された。しばらくして、スタッフからカメがプールの中にいますよという声が上がった。すぐに見に行くと2匹のイシガメが水底でじっとしている。その周りにはサワガニの甲羅やハサミなどが散乱している。これは食われていたイシガメがハンザキの輸送やプールに入れられたショックで吐き出された物だと思い、他のハンザキに再び食われない内にと急いで掬い上げた。

甲長9[㍉]ほどのオスと思えるカメで一方は甲羅が完全に残っていたが他は半分くらいに崩れていた。甲羅の中身はほとんど消化されているので、食われてから何日もたっていたものと思われる(写真5)。それにしても一度に2匹のイシガメを食っていたなんて、賀茂川のカメだけでなくあらゆる生き物が食い尽くされてしまうのではないかと恐ろしくなる。日本のハンザキに比べると抜群の運動神経を発揮するハイブリッドたちであるから、そんな心配も杞憂ではない気がする。

カメの仲間がハンザキに食われていたという報告は多くない。クサガメとイシガメの2例しか知らない。今回の場合はハイブリッドの食性だから同じ扱いにはできないだろうが、一度に2匹のカメを食ってしまうとは何とも凄い物だ。これらのルーツが本当に1972年の日中国交回復時に輸入された物であるならば、まだ40年弱の時間しか経っていない。日本産ハンザキがほとんど見つからないという現状と全長130[㍉]もの巨大なハイブリッドが2個体も収容されていることをどのように考えたらいいのだろうか？ 日本産はドンくさいから食われてしまったのであろうか？ どの位の数のチュウゴクハンザキが捨てられたのか不明だが、発見される数も少なく、90%以上がハイブリッドだといわれている。一方で次の世代も生まれていて、ハイブリッドの子供たちの成長は目を見張る物がある。現在、2008年と2009年生まれと考えられるハイブリッド幼生を飼育している。その餌の食いや成長の速さを見ると、40年弱で1[㍉]をオーバーする可能性を考えさせられる。2011年6月時点で2008年生まれは全長205[㍉]、2009年の方は145[㍉]になっており、日本のハンザキの5才4才をしのぐサイズである。

更に厄介なのは2008年生まれの幼生の斑紋が日本産と見てもいいような斑紋になってきたのである。尾端をカットしてDNA鑑定を受けており、ハイブリッドとして収容している。京大の松井教授は戻し交配も起きているのではと言われている。旺盛な食欲と高い運動能力、強い攻撃性などなど動物として生存競争に勝ち抜く条件だ。水産の世界では雑種強勢といって、病気に強く成長が早い、味のほうも優れていれば魚類養殖などではもてはやされる。中国では養殖されているチュウゴクハンザキだが、ハイブリッドがもてはやされることにならねばいいが。今年度から開始された京都市のハイブリッドの分布の現状調査はどうなっていくのだろうか？ 賀茂川の日本産のハンザキは果たして生き延びているのだろうか？ 日本特産のイシガメの将来も心配だ。

第2回作業ボランティア

常連のスタッフだけによる作業になるのだろうと思いながら、先月からの「作業ボランティア」公募は初回の13名に続き今月も14名もの参加があり、常連のスタッフ4名と共に3件の作業を実施していただいた。会員が5名、残りは一般の方の参加である。遠路わざわざやって来て頂き本当に感謝するのみである。ボランティアと言えば最近では災害発生時に全国区で応募する様な例が知られている。私どものような小さな地方の団体への応募の多さは意外でもあった。3組に分かれた作業班に的確に事を進めていただくためには、やはりこちらの意図がきちんと伝わるのが重要になる。個人的に力を使うことは少なくなり、多くの作業が順調に進んで行くので、有り難く良いアイデアであったとは思いますが、個人的には中々大変なことで疲れます。こんなことを言いますと叱られそうですが、今の所は私一人があれこれ指示を出さざるを得ない状況であり致し方ないところだと思っています。何しろ、私の希望をかなえてくださるわけですから、本当に感謝するばかりです。

“草抜き”班は、盛んに伸びる草を飛び石周辺から抜き去る作業です。草刈機でカットしてもすぐに伸びてきますので、やはり根こそぎ引き抜くしかありません。硬く乾いた地面から雑草のしぶとい根を残さず抜くのは中々大変な作業になります。

“塗装”班は国道からハンザキ研に渡る“ハンザキ橋”の欄干のペンキ塗りである。閉校になって久しい期間、剥がれるままにみすぼらしく見捨てられていたのだ。川を覗き見る私にとっては目の前にボロボロになった姿が目障りだった。サンダーをかけての本格的な塗装作業は、粉塵を吸い込むことになり、防塵マスクの用意を忘れたことが悔やまれた。

“魚礁造り”は、先月に続き龍野北高校の山内先生率いる高校生にお願いした。あまり多くもない魚影なのにカワウが飛来した後は、確実に激減している。魚の逃げ込む場所が無いからだ。アオサギやゴイサギは潜水して魚を追う事は無い。カワウは銀山湖から上流の黒川ダム湖へ遠征する途中で、アンコ淵に舞い降りて荒らしていく。流木をローピングしてカラーフェンスの古い物を丸めて固定した。これでしばらく様子を見ていくつもりだ。

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

今年1回目のハンザキ夜間観察会が30日に実施されたが、56名もの応募があり、2組のキャンセルがあったものの51名もの参加となった。20~30名のイベントとしてここ数年やってきたのだが、そんなに宣伝もしていないのに、今後は思いやられる事態だ。夜間の足場の悪い川端での観察会と条件が悪い。しかし、東京から福岡までという広い範囲からの参加である。見ることが難しい生き物であり、日本特産の生き物として注目されているからだと思う。マムシやヤマビルとのせめぎあいの中での観察会でもある。それでも大きな歓声上がる観察会なのだ。これが私たちの頑張りたいと強く思う一瞬である。

ハンザキ研日誌

2011年7月

- 1日 姫路市立水族館2年半ぶりのリニューアル・オープンセレモニーへ
- 2日 ・NHK取材、リポーター熊田曜子さんの悲鳴？が谷間じゅうに響き渡る
・カモガワ・ハンザキ8個体搬入、イシガメを吐き出す
- 5日 やまびこの郷18名見学に
- 7日 オオサンショウウオの健康診断
- 8日 ・田口勇輝・愛子夫妻と川端裕人氏夜間調査13個体測定
・西日本技術の職員6名と夜間調査、7個体測定
・ブラックバス全長52^{センチ}、2.4^{キログラム}サンプリング
- 10日 事務局会議、11名出席
- 11日 ・賀茂川ハンザキ脱走防止工事～13日まで、約27万円(京都市教育委員会)
・生野ダム下流のハンザキ追跡調査～13日まで(ウエスコ実施)
- 12日 日本工科専門学校田中科长と学生7名見学に
- 13日 ハンザキ・鯉のぼり入荷
- 14日 朝来市教育委員会竹村洋二氏他2名、マイクロチップ打ち込み実習に
- 16日 JNUS勝山一郎博士、姫路エコテック塩田部長視察に来所
- 17日 簾野の人工巣穴に主？確認、岡田副理事長
- 18日 未明に賀茂川から19個体のハイブリッド搬入、総計125匹目(内13匹死亡)
- 20日 ・やまびこの郷9名見学に
・福知山市教委・永谷隆夫氏、マイクロチップ挿入実習に
- 26日 兵庫県文化財保護審議委員会(県公館にて)
- 27日 水資源機構・川上ダム建設所、三重県教委、名張市教委より視察
- 28日 30日の作業資材の調達
- 30日 ・第2回作業ボランティア14名参加、スタッフ4名と除草、塗装、魚礁造り
・オオサンショウウオ夜間観察会、講師は岡田純博士、応募56名、参加51名
5個体のハンザキを観察、多数の参加となったので準講師に田口勇輝博士
・姫路市立水族館長・市川憲平博士夫妻視察
・兵庫県自然保護協会理事・大沼弘一氏来所、京都賀茂川のハイブリッド調査の件で
- 31日 ・見学予約の1グループ7人の他に、飛び込みの見学者3組11人あり。
・共同通信社のティモシー・ジョンソン氏のファミリー4人見学に、ヘルベンダーのティシャツ、帽子、ポスターなどハンザキグッズ多数のプレゼントあり。
・広島市安佐動物公園飼育係田口勇輝博士夫妻来所、昨夜のハンザキデータ受領
・昨日の作業と観察会の後かたづけの一日となる
・今月の調査測定個体は38個体